

B 7 外傷歯の実態と処置後の経過について

○麻生郁子、浦山静江、
小川亜希子、中尾哲之

なかお小児歯科 福岡市

小児期では、歯の外傷で診療所を訪れる患児は多い。乳歯外傷の処置後の経過、並びに後継永久歯への影響等を知る上で、経過観察は必要である。そこで今回、本院に外傷で来院した患児の実態、処置内容、並びにその経過について調査を行った。

対象は昭和63年1月から平成3年3月までに、乳歯外傷の処置を希望して訪れた患児61名(106歯)である。患児のカルテとX線写真をもとに、受傷時年齢、部位、来院までの日数、患歯の状態、処置内容、歯冠変色の時期、患歯の予後、後継永久歯への影響について調査した。患児は、男児34名、女児27名であった。受傷時年齢は0歳9ヶ月から6歳2ヶ月の間で、4歳が18名(29.5%)と多く、次に1歳で13名(21.3%)であった。受傷部位は上顎前歯部が82歯(77.4%)と非常に多く、また、歯数は2歯以内が55名(90.2%)であった。受傷から来院までの日数は、受傷の翌日が、17名(27.9%)で最も多く、次は当日で13名(21.3%)であり、大半は、7日以内46名(75.4%)であった。

次に経過を追うことができた53症例(93歯)について以下の調査を行った。患歯の受傷状態は動揺57歯(61.3%)、破折21歯(22.6%)、脱臼15歯(16.1%)であった。処置内容は、整復固定が51歯(54.8%)と最も多く、次は経過観察28歯(30.1%)であった。歯冠変色の時期は、受傷時より2週間までの期間が、変色歯18歯のうち8歯(44.4%)と多かった。患歯の予後を観察できたのは47歯でそのうち26歯(55.3%)は正常に永久歯と交換し、21歯(44.7%)は早期脱落していた。後継永久歯の完全萌出まで観察できたのは31歯で、そのうち外傷の影響の発現は1歯(3.2%)で、エナメル質の形成不全を伴っていた。

B 8 フッ素徐放性シーラントの臨床成績について

○小副川和子、植村美登里、石田万喜子
副島嘉男、進士久明、本川 涉

福岡歯科大学小児歯科学講座

現在、小窩裂溝填塞材は、齲蝕の予防を目的として乳歯および幼若永久歯の小窩裂溝に用いられ、効果をあげている。最近では、フッ素徐放性の小窩裂溝填塞材が開発され、多く利用されている。そこで、臨床における実態を調査したので報告する。

対照となった歯は、本学小児歯科診療室において、ラバーダム防湿下で填塞され、填塞後3ヵ月以上経過した乳臼歯166本、小臼歯45本、大臼歯146本の計357本である。このうち、脱落および破折が認められたのは乳臼歯166本中23本で約13.86%、小臼歯45本中1本で約2.2%、大臼歯146本中26本で約17.8%であった。また、脱落したシーラントの保持期間は、乳臼歯で平均約20.4ヵ月、小臼歯で5ヵ月、大臼歯で約24.39ヵ月であった。

次に、シーラントを施した歯で、後に齲蝕のため修復されたものは乳臼歯166本中12本で約7.22%、小臼歯においては認められず、大臼歯においては146本中1本で約0.69%である。修復が行われるまでの平均期間は、乳臼歯で15.5ヵ月、大臼歯においては21ヵ月であった。隣接面からの齲蝕が原因でほとんどの処置がおこなわれていた。

乳臼歯において保持期間が最も長かったのは、68ヵ月で、反対に最も短かったのは3ヵ月であった。小臼歯においては短かったのは5ヵ月で、長かったのは、28ヵ月であった。大臼歯においては、長かったのは77ヵ月、短かったのは3ヵ月であった。

このように、保持期間に差が認められた理由として患児の口腔清掃状態、シーラントの填塞状態、填塞部位などが考えられる。